

新刊紹介

天文台日記

石田五郎著

(筑摩書房, 四六判, 256頁, 800円)

石田さんはまたまた大変おもしろい本を書いた。これはちくま少年図書館というシリーズの中の一冊である。

日記の舞台は瀬戸内海をのぞむ標高 372 m の丘, 赤松の林の中に銀色のドームを見せる岡山天体物理観測所で, ここの 74 インチ反射望遠鏡は 1960 年に完成した。この 74 (ナナヨン) は日本の天文学者に大きな希望を与え, 天文学をおしすすめるたぐい稀な推進力となった。石田さんはこの観測所の創設の当初から, この天文台の実質的な運営を, がっしりしたその肩にせおってきた人である。

開巻の第 1 頁は [197* 年 1 月 1 日快晴 元日・セレスの発見] というサブタイトルがついていて,

「せまい分光器の観測室内で夜明けをむかえる。露出計の目盛りを照らす小さいランプ以外, すべてのあかりを消した暗い室内で, ひとり椅子にすわりファインダーの視野の監視をつづけていたが, いままでまっくらに沈んでいた丸い視野がだんだんと青味をまし, 横一文字の直線で視野を横ぎる分光器のスリットがしだいにくっきりと浮び上がってくる。そしていまままでに, もうなんどもその上を往復していた丸い星の像がみるみるうちに黄色く色あせてくる。」

盆も正月もない観測家の“私の星”との静かな対話で 1 年が初まる。サブタイトルはこの日付の中で解説してある大きな項目で, この後に南極老人星, ファインデングマップ, 深夜喫茶……とつづいて総数 59。

赤い星, 吸収線, スペクトル型など, 天文解説を主とした項目もあれば, イロハガルト, もずのひなど随筆家の面目を發揮したものもあり, また詩人のひらめきを見せたものもある。これらが渾然と料理されていて, 器械の説明や観測法, 天文現象などのかたい話も, 楽々とのみこめるようになっている手腕はさすがである。さらにこの本の面白さは天文台の舞台の裏側でくりひろげられる学者先生の生活絵巻で, 月報誌上や学会の壇上でお目にかかる第 1 線の研究者たちが, この本では匿名というお面を半分だけかぶって登場活躍する。これら諸先生の素顔を思いうかべながら読むのも本誌読者のおたのしみである。

日記の日付は全部で 141 日で, 最後は 12 月 31 日クーデ観測室のインターホーンからひびいてくる歌の句

「日はすぎ去りて, とどまるはわれ」に終る。

あとがきで筆者は次のように述べている。

「天文学は巨大科学だといわれているが, まだまだ一匹狼的な面も多い。研究者のそれぞれが「私の星」をもっており, その星のイメージをいつも胸の中にあたためている。観測—この「私の星」との対話の時には, 研究者はつねに孤独である。……

暗い星との対話をかさねるには, 夜という休息と睡眠の時間をさかなければならない。また夜の暗やみは, ときに人の心を裸にする。このような特殊な生活条件のなかで人間がどんな行動をするかを私は記録してみようと思った。……その結果としてそれが天文学の解説の役をつとめるであろうが, 書きつづられたすべては, 私の胸に反映した心象風景であるのかもしれない。」

シリウス伴星, チホの星, W・ハーシェルなど天文学史のエピソードも興味深く, 写真やイラストも親切である。若い人達のひろい意味での探検紀行的な読み物として, また天文に興味をもつ読者諸君に一読をおすすめる。(下保 茂)

太陽・地球・電波

J.A. ラトクリフ著

関口理郎 訳

(平凡社, 四六判, 234頁, 550円)

最近の科学知識の普及によって, 天文学や原子核などのかかなり程度の高い問題までもが一般の人々に知られるようになったのは非常に結構な事である。それに対して, これは私の個人的な感じかもしれないが, もう少し我々に身近かな, わが地球の上層大気の状態については, 意外に知られていないような気がする。それは, この超高層大気の観測, 測定が非常に困難であったり, また現象の多くが極めて複雑であり, またお互いに関連し合っていて, 明快に一言で説明しにくい事が多いという事が理由になっているかもしれない。

平凡社の世界大学選書の一冊としてのこの書物は, 地球の超高層大気の物理を一般向きに解説したものである。著者のラトクリフは Magneto-Ionic Theory を始めとする, 超高層大気の物理の権威であるだけに, この複雑な問題を平易に, かつバランスの取れた形で解説している。

始めに, 初期の地球大気の分布や温度測定, そして電離層発見の過程を紹介し, 読者に以後の章に進む予備知識を与える。

そして, II 章以降で超高層大気の電離を始めとする, いろいろな現象を起す原因が何であるかを, 学問の進歩の流れを追いながら, 最新の理論までを余す所なく平易に解説している。

これを読む事によって, 数多くの人工衛星や宇宙ロケ

ットの観測、また地上からの、太陽、電波、地磁気等の観測、そして極地の観測等が、超高層物理学のどの部分を分担し、どのような意義を持ち、どのように関連し合っているかが理解されるであろう。

この学問について、私自身、断片的な聞きかじり程度の知識しか持たせていなかっただけに、この書物によって、教えられる所極めて大きかった。

内容は極めて平易に説かれているが、学問自体が極めて複雑なだけに、この書物を理解するには、若干の自然科学的な基礎知識を必要とする。高校高学年から大学以上の学生諸氏や、天文、地球科学とそれに関連する仕事に従事する人々に是非、一読をおすすめする。

ただ、訳文がもう少し日本語としてこなれていればなお、よかったと惜まれる。また、超高層関係の学者には日常語のような SID とか PCA などの略語も、例えば訳者註としてそれぞれ、Sudden Ionospheric Disturbance, Polar Cap Absorption と原語を示された方がよかったのではないか。同じように、「磁気電離説」とか「突発E層」とかは、私が浅学のため、あまり聞いた事のない訳語なので、また、それぞれ Magneto-Ionic Theory,

Sporadic E Layer と併記された方がよかったかとも思える。

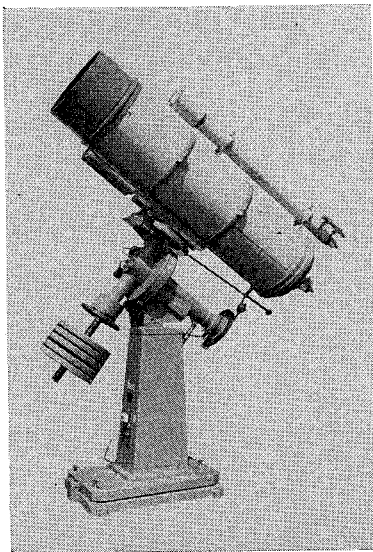
原著を見ていないが、誤訳ではないかと思われるのは137頁の太陽の「光子圏」が、これは光球とすべきであろう。Photosphere と Photonsphere の見まちがいがあるいはミスプリントではないか。

書店の棚で、「太陽・地球・電波」という表題を見ただけで、本書の内容の見当をつけられる読者は少なからう。原著の副題「電離圏と磁気圏への手引き」を表紙に併記の方が親切ではなかったろうか。(土屋 淳)

学会だより

東京天文台公開

恒例の東京天文台公開(本会后援)が、10月14日(土)午後2時から8時まで行なわれます。台内諸施設が公開されるほか、資料の展示、映画、天体観望(夕方から)等が計画されています。なお雨天の際には中止されます。



天体望遠鏡
ドーム、製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|---------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東京大学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・チェゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリウス大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 西村製作所

TEL. (075) 771-1570
691-9580